黒潮町の文化財 No.19

『鹿々場古窯址群』

鹿々場は浮鞭から少し山の方に入った、周りを山に囲まれた広い平野です。浮津と鞭の間を南流する小川（こぐた川）に面しているので、平野のほとんどは田んぼとして利用されています。

鹿々場古窯址群は、小川の左岸にある畑の山際に築かれた、須恵器を焼成する窖窯跡です。昭和40（1965）年に発見されました。

※平成2（1990）年旧大方町文化財指定。

■古窯址群

発見当時、付近の小川や岸に、開墾時出土した須恵器（焼成時の不良品）が多量に散乱していました。

窯体は4～5基で、調査時には灰源も確認されました。

また、周辺の畑や水田には工房址、住居址の存在も考えられます。

この時代の町内の宮崎遺跡（加持）やその他の遺跡から、この窯で焼成した須恵器や同破片が多く出土しています。これは祭祀用具と生活用具の両方です。

出土遺物の特徴から、8世紀から9世紀ごろの遺跡です。

土佐で須恵器が生産されだしたのは7世紀以降とされていますので、少なくとも7世紀末ごろには、この地方でも須恵器の生産が始まったと思われます。

須恵器窯跡は、鞭地区内に別に1カ所あり、これらの遺跡は、この時代の大方地域の生活文化を考える上で重要な遺跡です。

■須恵器

日本で古墳時代から平安時代まで生産された陶質土器です。

青灰色で硬く、同時期の土師器とは色と質で明瞭に区別できます。

5世紀に朝鮮半島から伝わり、古墳後期の6世紀には列島各地で須恵器窯が作られ、須恵器が生産されました。

主に祭祀や副葬品に用いられましたが、普及が進んだ後期になると集落内からも出土し、西日本では須恵器、東日本では土師器が優勢という違いが現れましたが、奈良時代10世紀には絶えました。

■鞭遺跡

昭和43（1968）年に「色見ダバ遺跡」、昭和48（1973）年に「東ダバ遺跡」と「奥ダバ遺跡」が発見されました。

昭和62（1987）年、県がこれらの遺跡を併せて「鞭遺跡」と改称しました。

範囲も鞭の上地区の全体に及んでおり、縄文期から中世（平安後期、室町）期にかけての複合遺跡です。

遺物は、中世の土器を除き、すべて石鏃類（ヤジリ）を主とする石器類です。

これらは主として狩猟に使用されたものであって、当遺跡は定住地ではなく、狩猟の場、つまり縄文人のキャンプ地であったといえます。

中世の土器は、隣接する鹿々場古窯址群において生産されたものがほとんどです。

埋蔵文化財ツアー

鹿々場古窯址群、鞭遺跡、早咲遺跡を中心に『文化財を巡るツアー』を実施します。

各家庭にチラシを配布しますので、詳しくはそちらをご覧ください。

○お問い合わせ
教育委員会 文化振興係
（大方あかつき館内）
☎43―2110（直通）